

所属・資格 心理学科・准教授

申請者氏名 齋藤 慶典

研究課題		感覚刺激によるリラクゼーション効果についての生理心理学的検討 - 触覚刺激による効果 2 -
報告の概要	研究目的 および 研究概要	これまでのリラクゼーション技法のような能動的な方法ではなく、感覚刺激を受け取るという比較的受動的な方法で、より即効性のあるリラックス法を探索的に検討する一連の研究の一部である。今年度は、前年度に引き続き触覚刺激を用いて検討を行った。前年度は硬さの異なる2種類のウレタンフォームを直方体にカットしたものを触覚刺激として用いていたが、今回は硬さの異なる3種類の軟質ウレタン樹脂で鶏卵型の触覚刺激を形成して触覚刺激とし、 active touch による手掌への刺激が心身両面に与える影響について、主観的評価とともに、 fNIRS を用いて前頭部の血流変化を記録し検討を行った。
	研究の結果	実験は、 fNIRS と同様の脳血流変化を記録する fMRI の測定手続きに準じて事象関連法を用い、1参加者あたり各刺激10回の繰り返し測定を行った。参加者には各試行の触覚刺激提示後に、快-不快についての5段階評価を口頭で述べてもらった。快-不快の主観的評価については、3種類の硬度の触覚刺激すべての組み合わせにおいて有意差が認められ、柔らかいほど快と評価されることが示された。 fNIRS によって記録されたオキシ・ヘモグロビン変化のデータについて、条件ごとに加算平均を行った結果、他の刺激にくらべてもっとも柔らかい触覚刺激を触っている時に、右前頭極付近でのオキシ・ヘモグロビン値が上昇する傾向が見られた。
	研究の考察・反省	先行研究では、味覚や触覚といった感覚刺激に対して快と判断するとき、眼窩前頭皮質の活動が亢進することが示されている (Francis et al., 1999)。先行研究での触覚刺激はテクスチャを制御し快・不快の情動を惹起するものであったが、今回の研究では、テクスチャを統一し、触覚刺激の硬度を制御することによる情動喚起によって、同様の脳部位について活動亢進の傾向が認められた。このことは、触覚刺激が持つ質感の種類にかかわらず、触覚刺激による快感情の惹起は前頭極付近の活動亢進と関連している可能性を示し、触覚刺激による快感情を評価する指標としての有用性を高める結果であったと考える。リラックス状態を、覚醒水準の低下と快感情が組み合わさった状態と考えると、実験計画上、今回は快のみについての検討しかできなかったことが反省点として挙げられる。
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所 研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	<p>※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。</p> <p>前年度の研究から、今回の研究にも性差の影響があると考えられたが、現在までのところ男性参加者のデータのみであるため、女性参加者を加えた検討を行った後、研究成果を公開したいと考えている。</p>	